

# 東峰村の災害復旧支援業務報告

派遣先 東峰村 建設水道課 災害対策室  
所属 危機管理室 危機管理課  
氏名 梅田 清春  
活動期間 平成30年4月1日～平成31年3月31日

## 1 はじめに

私は、平成30年4月に東峰村の災害復旧支援を担う期限付き職員として採用され、1年間主に災害復旧工事の工事発注、監督等業務に携わらせて頂きました。

採用される前は民間で主にまちづくり、宅地造成に係る仕事を経験しており、色々な業務経験が災害復旧にも活かせるのではとの思いで取り組んでまいりました。

思い通りにいった点、いかなかった点、印象に残った点等について、この場を借りて簡単に報告させていただきます。

## 2 現地での主な業務、また活動を通して印象に残ったこと

### (1) 災害パトロール

私が活動した平成30年は北部九州災害があった平成29年と同様な集中豪雨があった年でした。7月5～7日の連続雨量が430mmを超えて、災害から1年後の「追悼記念式典」が心穏やかならざる日となりました。

豪雨後に新たな災害（増破も含め）が発生していないか、チームを組んでパトロールに廻りました。土地勘がないので状況把握に苦労しましたが、地元住民の方との対話の中で災害箇所、危険な兆候箇所等の情報を頂き、大変助かりました。

### (2) 地元の方との対話

裏山斜面に亀裂が見られる、護岸の石が少し動いていないか等の地元住民の方の不安の声に対して、初めは体が震えました。緊急対策として防災シートや、バリケード等の提案を行い村で実施して頂きましたが、話を聞き相談に乗ってあげただけで住民の方がほっと安堵の笑顔を見せて頂いたことがとても印象に残っています。

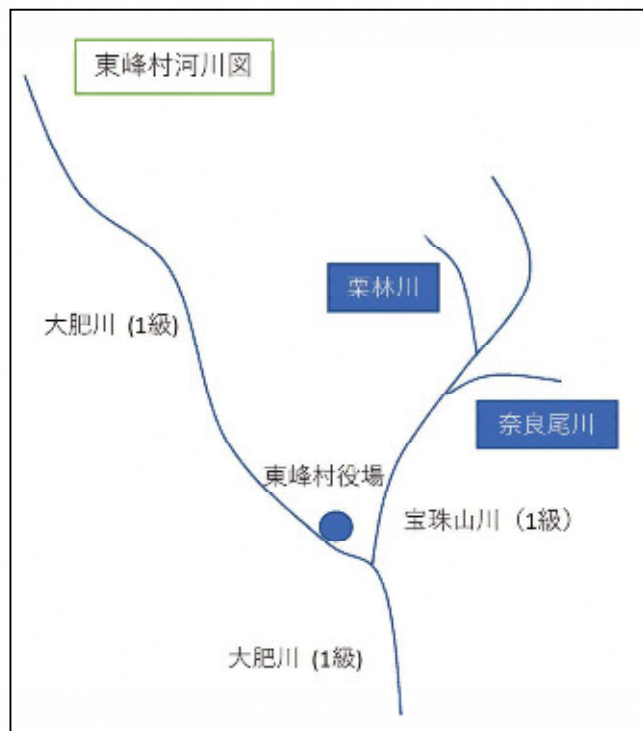
### (3) 設計・積算

着任時、新規に設計・積算を受け持った災害復旧工事の実設計は4件、全て河川災害復旧工事（栗林川、奈良尾川ほか：復旧延長L＝570m、50工区）でした。

査定はすべて終わっており、4件とも全て数量計算書、図面についてコンサルタントの成果品が整っていたため、積算するだけでしたが、実はこれが大苦勞。この20年間、役所の積算システムを扱ったことがなく、積算のイロハを勉強しながらの設計書作成となり大変時間がかかってしまいました。

しかしながら、皆に助けられ結果として何とか入札予定日間に合わすことが出来たものの、その後の工事発注が大問題。

1件を除き5度応札者がいない「入札不調」となったため、6月発注が伸びに伸びて12月(2件)、3月以降(1件)に契約がずれ込みました。



#### (4) 工事監督

私が引き継いだ工事は既発注(3月早期)が2件。上記4件を加えて計6件の予定でしたが、発注が入札不調で遅れたため、年間通して実質3件でした。

この位の量であれば楽勝かな、と安心していたところに大きな「落とし穴」。請負業者がなかなか着工してくれないのです。監督員の権限で何度も督促しましたが、手持ち工事が一杯で手が回らない。村が発注した他の公共工事も殆どが村内業者のため、優先順位(危険度)の高い被災箇所から順に着工している状況。災害復旧工事の発注、施工が進まない一つの要因を見たと思いました。

### 3 現地活動の推進体制

#### (1) トップの思い

明日からいよいよ東峰村で単身赴任となった3月の日曜日、家内と東峰村を下見に行きました。大肥川沿いに、それは美しい桜の木々が「災害」をよそ目に華やかに出迎えてくれました。「もっと美しい桜が見られる場所がありますよ」とそこにおられた初老の男性が近くを案内してくれます。「私は北九州市から来ていて明日から役場でお世話になる者です」と自己紹介すると「そうですか、北九州市さんには大変お世話になっているんですよ」と笑顔。横にいた方が、「澁谷村長です。」とそっと教えてくれました。

#### (2) 推進体制

災害対策室(公共災班)の技術陣は福岡県2名、長崎県1名、村(京都府)1

名、コンサル2名に北九州市4名、合計10名の混成部隊です。

これにCM（コンストラクション・マネジメント）班の2名が加わって、農地復旧、林地復旧等との調整を図りながら、村の災害復旧を進めていくわけですが、この混成部隊、皆個性の強い「年輩の新人」が多く、はじめはどのように仕事を進めてよいか戸惑うことも多かったのですが、査定当初から在職の先輩方、災害経験豊富なリーダーのお陰で、仕事のやり方を覚え、何とか進めることができました。

全体進捗率は、入札不調が頻発したため予定の約50%※に留まりましたが、災害復旧を円滑に進めていくためには、経験あるリーダーの配置と人事異動の心配の少ない体制（CM班の役割、活動等）が今後重要になってくると思いました。

※ 最終的には、81%の入札率を達成予定。（平成31年3月末）

### (3) 支援体制（宿舎）

既に他の方も書かれていると思いますが、宿舎は、日田市に用意して頂きました。国道沿いの便利な場所で、夜遅くでも開いているスーパーやレストランが近くにあり、私生活では不自由はありませんでした。このお蔭で1年間頑張れた、と思っています。

北九州市と村のバックアップ体制に感謝します。

## 4 現地での業務で困難であった点や改善すべき点

### (1) 発注・施工マネジメントと地元業者の育成

村内業者8社に対して、公共災の年間発注予定額は約20億円（H30年度）。これが多いのか少ないのか、俄かに判断できませんが、発注事務が停滞したのは事実。地元業者の育成は大事ですが、「大括り」「一般競争」の方式も含めて発注・契約のシステムなり施工マネジメント（施工体制、地元枠等）のルールを見直す必要があるのではと思いました。

### (2) 積算システム

災害復旧工事でも、工事発注には詳細な数量計算と精緻な積算が必要であり、そのために土木技術者の一時的、しかも多数の支援が必要という側面があります。

「概算発注」という方式もありますが、精算業務が後に来るだけで労力は変わらないといわれます。公共積算の全国的な問題だと思いますが、積算システムをもっと簡略化する、或いは外成化（見積り発注）を増やす等も必要と思いました。

### (3) 地域振興を見据えた視点

何のために公共施設の復旧を行うのか、そこに人々の生活があるからです。しかしながら、災害をきっかけにお年寄りたちはそこに住むことをやめ、子供たちの住む都会へ移住する人も増えています。そう考えるとインフラ復旧・整備は単に急いで元に戻すのではなく、土地利用転換も含めた長期的な視点、本来の地域振興を見据えた視点が大事だと改めて思いました。

## 5 本市の防災に必要となること

### (1) CM制度の確立

災害復旧に他の自治体からの支援を仰ぐことは様々な意義もあり大事だが、これから頻発する!?であろう「大規模災害」に対してはスピード、経験・技術力のある民間（ゼネコンやコンサルタント等）に思いきって委ねる（業者選定、発注事務も含めた）復興CM方式を導入することも考えるべきではないか。

### (2) 土木技術者の資質の向上

土木技術は、本来市民生活に根ざした現場での応用技術。専門性に分化した行政土木だが、「災害復旧」がそうであるように住民の不安を払拭し、住民生活をフルに支援する総合職的な土木技術者の育成、資質の向上も図っていくべきではないか。

### (3) 専門工事業者の育成・活用

今回の災害復旧では、景観に配慮した「石積み護岸」の設計・施工が多かったが、石積みのできる専門職人が不足している実態を見た。全国的な問題のようだが、石積み、石張り等の優秀な「技能士」を育成し、一定量確保していく施策を特に地方行政において取り入れていく必要があるのではないか。

## 6 おわりに

九州北部豪雨災害は、「線状降水帯」によって引き起こされたといわれています。キノコ雲のように不気味な積乱雲（写真）がどのようなメカニズムで発生し、どれだけの雨を降らせるのか、まだ解明されていない部分も多く、予測は困難な状況にあるといわれています。



温暖化が進行している現在、北九州でも東峰村と同規模の豪雨が、今年降らないとは誰も断言できません。東峰村で経験した災害復旧業務は他地区の一つの事例ではありますが、貴重な経験であり、大規模災害に備えるシミュレーションの一つとして、現地で収集・提案された有効なノウハウ・アイデアは、市の対応マニュアル等に蓄積し、きちんと明日に備えておく（伝えていく）ことが大切だと感じた次第です。

#### 写真

福岡市東区から撮影した朝倉市上空（H29.7.5撮影）

（平成29年7月九州北部豪雨災害 災害状況と復旧事業計画概要：朝倉県土整備事務所）

最後になりましたが、災害復旧支援という貴重な機会を与えてくださった北九州市、東峰村の関係者の方々に心より御礼申し上げます。 以上